

〔書評〕

『不安に生きる文学誌』あるいは「コロンブスの卵」を読む

平野 芳信

木村一信氏の近著『不安に生きる文学誌——森鷗外から中上健次まで——』は、中島敦ならびに南方徴用作家研究者として著名な氏の別面を我々に見せたように思える。

全体の構成は、サブタイトルに示されているように、森鷗外の『舞姫』から中上健次の『紀州 木の国・根の国物語』までの一世紀に及ぶ時間軸の中から、先の森鷗外・中上健次をはじめとして、夏目漱石・有島武郎・寺田寅彦・芥川龍之介・徳永直・太宰治・中島敦・大辻司郎・有吉佐和子・遠藤周作・柄谷行人・阿部知二・高村光太郎・高見順に関する一七編の作家論及び作品論と六編のエッセイが、四つの部分にほぼ均等に配されている。

*

思うに、刊行された本書を手にして、「やられた。その手があったか!」と膝を打ったのは私ばかりではあるまい。私見によれば、いわゆるテキスト論の流行以降、日本近代文学研究の学的方法は先鋭を極め、ついには雲散霧消と化した。いわゆる「パブル崩壊」以降に経済の失われた十年が到来したように、学問の世界

にも同様の事態が生じたのである。それに伴い、研究を一冊にまとめ世に問うことも難しくなったのではないだろうか。なぜなら、研究を牽引する方法論の主調が失われた時代にあつて、我々は書き連ねてきた論考をどのような縦糸で貫き、一冊の書として編めばいいのか自問自答せざるを得なくなっているからである。

そのような、いわばポスト・フェストム的な（これを「宴の後」ととるべきか「後の祭り」と解釈するべきかは議論すべきだろうが）状況のもとで、木村氏は「あとがき」の冒頭で、「本書の表題とした『不安に生きる文学誌』は、一九三〇年代に日本の文学界で喧伝された、いわゆる『不安の文学』と関連するものではない。」と宣言する。さらには「本書に言う『不安』は、ごく一般的な語の意味としての謂で使っている。」とすらいつてのける。

何のことはない、要するに「難しく考えず、単純に一冊にまとめればそれでよいのだ。」と諷しているようではないか。「コロンブスの卵」と本書を呼んだ所以は、ここに存するのである。

しかしながら、木村氏の謙遜ともとれる言葉とは裏腹に、本書

を構成する論考の数々には共通して、ある種の力強い精神が認められるように思われる。それを一言で要約することは、私のごとき凡常の徒にはいささか荷が重い。が、書評を引き受けた任において、あえていうならば、「文学研究におけるジャーナリズム」というべき方法への希求ではないかと思われる。

ここでいうところの「ジャーナリズム」とは、いわば木村氏の掣みに倣っている。すなわち、徒に難解な謂ではなく、事実（あるいは資料・文献）の積み重ねからある真実を紡ぎ出すという單純な意味においてであるが、昨今のいわゆる論文の体裁をとった文章には、決定的に欠けている要素の一つではなからうか。

おそらく木村一信的方法を「ジャーナリスティック」と呼ぶ時、一般的には、「Ⅲ」に収められた「異国に育つ——〈ジャワ〉の有吉佐和子——」に、その典型を見出すかもしれない。

しかし、意外に思われるかもしれないが、木村氏の特徴が、理想的に發揮されているのは、「Ⅱ」の二番目に位置する「足場を求めて——徳永直「光をかかぐる人々」——」ではないだろうか。この論考は、収載論文中、最も早く執筆されたものであり、木村氏自身「あとがき」でその思い入れの強さを述懐されている。余計なことだが、実は私にとっても忘れえぬ論文の一つであった。

徳永直の「光をかかぐる人々」は、昭和一〇年代後半の太平洋戦争下の文学的に不毛な時期における数少ない傑作の一つである（といっても、初出の「日本近代文学」発表時点で、大学院生になって日の浅かった私などは、この論文によって「光をかかぐる

人々」の存在を教えられた次第だった）。木村氏はず、関根弘・竹内好・小田切秀雄の指摘を踏まえつつ、この作品に対する評価の高さを確認する。

その上でこの作品が七章からなる堂々たる長篇小説でありながら、実際は上巻に相当する部分のみが刊行され、それ以降の部分は未完のまま放置されている点、さらには作者徳永が一九五八年にこの世を去るまで、常に完成への意志を保持し続けていたことを、自身の文学碑の除幕式に出席した彼の言に照らして、同席した熊本市在住の人々の証言を基に指摘する。文学研究は作品と文献の中だけで成立し、なおかつ完結すると思ひこんでいた私は強い驚きを受けたことを覚えていいる。つまりジャーナリストのように、生き証人に取材していわゆる「裏をとる」という方法があるのかということである。

いうまでもなく、小説家自身やその家族および親族へ取材するという方法論によって、文学研究の一端が成立していることは知ってはいたが、半ば一般人とでもいへべき範囲にまで調査を広げるといふ点が新鮮だったのである。しかも当時の私にとって、通常この方法は作家論にとどまることが多いという印象があったのだが、そうではなく、作品論の出発点になっていることも傾聴に値したのだ。

この後、木村氏の筆は「光をかかぐる人々」における創作動機として、作中人物「私」とほぼ同一の伝記的事実をもつ作者徳永直が、一九四〇年五月に朝日新聞社によって開催された「日本文

化史展」で、展示された印刷機と出会ったことを指摘する。次に「私」の関心が日本のグーテンベルグである本木昌造へと移りつつあったまさにその時に、作中人物である「私」がかつて発表した「印刷文献に関する随筆」を読んだ「日君」の訪問を受け、それに端を発して邂逅した三人がすべて元印刷工であるという偶然のもつ意味が要であることが示される。そのうちの一人三谷幸吉の死が契機となつて、続篇の執筆が意図されたのであるという解釈がなされる。またその死は同時に、創作意図の微妙な揺らぎをも招き、ついには完成できなくなる遠因となつた可能性をも炙り出し、論が閉じられる。

もはや詳述する余裕はないが、その他では「Ⅱ」に所収された太宰治に関する二篇の論考にも、木村氏の方法が過不足無く生かされているように思えたこと申し添えておこう。

*

いささか私自身の思い出も交え、書評の域を逸脱してしまったような気がするが、最後に辛口のコメントを記しておこうと思う。

本書に収められた論考を読んで、最も残念に思うことは、ここ数年のうちに発表されたものがいささか短いことに尽きるだろう。

初出のメディアを確認するとそのどれもが紙幅の限られたものばかりであり、その制約の中でそれなりの創見を提示し得ているとは思われる。初出段階ではそれで良からう。しかし、一冊の

書にまとめるに際しては、手を入れるなり、書き直すなりして、その論点を押し広げる努力してほしかった思うのは、無い物ねだりであらうか。

たとえば、「Ⅲ」に収められた「現代文学への挑戦——柄谷行人「反文学論」——」における、柄谷がいわゆる老大家たちの「文」に見出した『言葉』の復活、すなわち「肉体性」をもった言葉の復活」の内実等々は、今少しの（その後を含めて）議論の展開を聞きたいと思う一例ではなからうか。

妙な喩えだが、映画の予告編ばかりを見せられ続けているように、本編が見たいという欲求不満が溜まっている後学は決して少なくないように思われる。

木村一信氏は、このところ激職につき、国の内外を問わず文字通り飛び回っていると側聞している。にもかかわらず、酷であることを承知の上であえて申し上げた。願わくば木村氏の身に、研究に専念できる時間と環境の余裕が生まれんことを祈念して、この妄言を終りにしたい。

（ひらのよしのぶ・山口大学人文学部教授）
〈付記〉

この書評原稿を書き終え、編集部に送付したのは二〇〇九年二月五日のことであつた。なぜそういえるかというとパソコンファイルとして保存した最終日時が、二〇〇九年二月五日午前一時二十九分であつたと確認できるからである。

それから一週間ほどして、「日本文学」第五八卷第二号が手許に届き、同紙に掲載された小泉浩一郎氏の「書評『不安に生きる文学誌』」を読んでいささか驚いた。

偶然とはいえ、小稿と論点や評価軸の設定等々に類似した部分があったからである。いうまでもなく、それは『不安に生きる文学誌』に収められた論文の多くが、普遍的な問題提起や研究史上逸することの出来ない指摘を行なっていたからに他ならない。

誤解されることもないと思われるが、発表時期の微妙な近接を考慮し、校正段階で一言書き添えた次第である。

『不安に生きる文学誌』あるいは「コロンブスの卵」を読む